

# 増野三良とタゴール英詩集

新田 杏 奈

## 一 忘れ去られた翻訳者たち

インドのカルカッタに生まれたラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore 一八六一―一九四一) は世界最大の神秘的詩人の一人であると共に、戯曲作家、小説家、音楽家、また画家としても優れ、教育や社会改革の面でも大きな影響力を持った二〇世紀前半のインドを代表する文化人である。タゴールはアジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したことで知られるが、前後五回に渡る来日から、日本と縁のある人物としても知られる。

従来のタゴール研究において、タゴールと日本の関係は以下の二つの観点から論じられることが多かった。<sup>②</sup> 第一はタゴールと日本の文化人との交流及び日本讚美の視点、第二はタゴールの日本批判及びそれに対する日本の知識人たちの反応である。研究史の中心は、日本に対するタゴールの思想や言葉にあり(傍

点筆者、以下同)、彼の作品そのものが日本でどのように受容されてきたのかについて論じられることは少なかった。

この前提には、「タゴール作品」<sup>③</sup>の初期の受容が欧米経由の間接的なものであり、彼の文学作品がその思想ほど日本人に影響を及ぼさなかったという通説的な見解が存在する。丹羽京子氏は「ロビンドロナトは欧米で成功したからこそ日本でも紹介され、一時はブームまで呼んだのであるが、それが根付くためにはあまりに間接的な受け入れ方であり、必然的動機も乏しく、結局強い関係を持つことなく終わったのであった」と述べている。<sup>④</sup>

このため、タゴールの翻訳者についても、わずかな先行研究を除き、その存在は長らく忘れ去られてきた。しかし、タゴール作品を日本に紹介した初期の翻訳者たちを詳しく調べていくと、そのほとんどが英米文学の出でありながら、彼らはタゴール作品の熱心な研究者でもあったことがわかる。本論で扱う増

野三良はまさにその筆頭として挙げられる人物である。

本論は、これまで見過ごされてきた翻訳者たちの存在を受容史の重要な起点としてまとめ、タゴールの研究史上に新たに付与することをめざす。なお、同時期にタゴールの翻訳に携わった人々として、内ヶ崎作三郎や三浦閑造、また戯曲の翻訳者として磯部泰治などが存在するが、本論ではまず英文学者詩人増野三良に注目したい。彼は我が国において最も早くタゴールの英文詩を発見し、翻訳紹介の先頭に立った人物である。

## 二 コスモポリタン詩人増野三良

まずは増野の略歴と翻訳活動の流れを整理しておきたい。<sup>(6)</sup> 増野三良（一八八九—一九一六）は島根県浜田市に生まれた。幼い頃から創作意欲が旺盛であり、明治三十七年（一九〇四）、「明星派」歌人として一五歳で文学活動を開始している。地方歌人として精力的に活動し、与謝野鉄幹からの信頼も厚かった。その後、早稲田大学英米文学部英文科に入学し、明治四四年に論文『My Own Definition of Poetry』を書いて同校を卒業している。増野は、習得したフランス語で象徴派詩人ポール・ヴェルレーヌの翻訳を始め、それらを佐佐木信綱主宰の短歌雑誌『心の花』や、北原白秋編集の文芸雑誌『朱槿』<sup>(7)</sup>に積極的に投稿した。このように、明治四〇年以降の増野は詩作から一転して、翻訳活動に没頭していく。卒業後は、直ちに大阪毎日新聞社に就職したが肌に合わず、すぐに退社すると大正元年（一九一二）

から大正二年にかけて、肺を病み帰郷するまでの約一年半を放浪しながら過ごした。しかし、帰郷後も彼の文学活動は衰えず、大正三年二月に、季刊雑誌『未来』を三木露風、服部嘉香、柳沢健ら象徴主義を愛好する詩人らと共に創刊すると、その第一集に劇詩「智慧樹」を発表した。若き増野は英語を駆使し、バイリンガルな詩人として旺盛に活動したが、大正五年三月三日、結核によりわずか二七歳で夭折した。

元来歌人であった増野が、詩の翻訳に目覚めるきっかけにヴェルレーヌの存在がある。佐野晴男氏の年表によれば、増野の翻訳活動は明治四二年十一月、読売新聞の日曜付録に投稿した二編のヴェルレーヌ詩から始まっている。<sup>(8)</sup> 増野はヴェルレーヌの詩を『心の花』にほとんど毎月のペースで発表しており、明治末期の増野はもっぱらヴェルレーヌの翻訳に熱中していた。<sup>(9)</sup> さらに同時期、増野はアイルランドの詩人オスカー・ワイルドにも深く傾倒していたようである。

しかし、大正期に入ると、増野の関心は欧米から徐々に東方の詩作品へと変遷していく。彼は一世紀のベルシアの詩人オマル・カイヤームに興味を持ち、彼の四行詩『ルバイヤート』の翻訳を試みている。杉田英明氏によれば、『ルバイヤート』は大正改元から二年ほどの間にエドワード・フィッツジェラルド（Edward FitzGerald）の英訳からの重訳が立て続けに三、四抄訳の形式で発表されており、その劈頭を飾るのが大正元年十一月、『朱槿』における増野三良訳「ルバイヤート」（波

斯四詩」であったという。<sup>10)</sup> 前田夕暮によれば、カイヤームの詩は既に訳了し、詩集はまもなく刊行予定であった。しかし、これは増野の早逝により実現しなかった。<sup>11)</sup>

増野が古今の印度詩を翻訳紹介するのは大正二年頃からである。中でもタゴールの詩には深い感銘を受け、その作品の翻訳に晩年のほとんどの時間を費やした。増野はその生涯において、自家詩集を上梓することはできなかったが、死の前年に、タゴールの三冊の英詩集『ギタンジャリ』(大四年三月)、『新月』(大四年五月)、『園丁』(大四年一〇月)を驚くほど短期間で東雲堂書店から出版している。<sup>12)</sup> また、最晩年には詩人野口米次郎と交流のあった印度の女流詩人サロジニ・ナイドウの詩にも興味をもち、数編ながら短歌雑誌『詩歌』に発表している。<sup>13)</sup>

増野は世界中の象徴主義的、浪漫主義的傾向の詩人を好んだように思われる。彼は亡くなる前年、次のような言葉を残している。

「日本人と印度人との間に東洋魂が通っている」なぞという人種的偏見は私には少しもありません。真に悲痛なコスモポリタンですから、自分自身は永遠の渴(Tschodadih)のためには或は殆ど妄動的にアルテュル・ランバウの如く亜非利加に突進するかもしれません。或はまたボオル・ゴオガンの如くマルクサス群島の土となるかもしれません。<sup>14)</sup>

彼は仏訳及び英訳詩集を通して、自らの心に触れる世界中の詩人の声を遍く訪ね聞こうとしたコスモポリタン詩人であった。

### 三 タゴール翻訳史上にみる増野の位置

では、こうした増野の翻訳活動はタゴール翻訳史上にみて相対的にどのように位置づけられるのか。日本におけるタゴール翻訳の歩みを私なりに概観すると、それはおよそ次のような六つの特徴的な段階を経ている。<sup>15)</sup>

- ・第一期 大正四年(一九一五)前後(英文学者を中心に英文作品の翻訳が集行的に行われた加熱期)  
大正五年から一二年頃まで(翻訳は下火になり、評論が中心となる冷却期)
- ・第二期 大正一三年から昭和一二年(一九三七)頃まで(タゴールの三度目の来日もあり、長編小説の邦訳、戯曲の上演、短編詩集の訳註などが行われる回復期)  
日中戦争以後、敗戦後一〇年頃まで(わずかに仏文学者の宮本正清や詩人山室静らにより翻訳が続けられた停滞期)
- ・第四期 昭和三〇年頃から四〇年頃まで(独仏文学者片山敏彦、翻訳家高良とみなど、アポロン社を中心に著作集や詩選集の刊行が行われ、渡辺昭宏によるベンガル語からの邦訳も始められる準備期)
- ・第五期 昭和四〇年頃から平成初年頃まで(印度学者森本達雄、我妻和男など、第三文明者社を中心に本格的なタゴール著作集が編纂され、完成に至る発達期)
- ・第六期

この長い翻訳史のなかで、日本で最も早くタゴールの詩を紹介したものが、大正二年二月発行の『朱欒』に掲載された増野三良訳のベンガルのラビンドラ・ナス・タゴア「印度古詩」あらゆるもののある国」という詩である。<sup>(17)</sup> 太田三良氏編「日本におけるタゴール文献―雑誌」は大正三年二月の内ヶ崎作三郎訳「榕樹の陰」を最初としているが、『朱欒』における紹介はこれよりも一年前である。

増野自身この詩をもつて、タゴールの第一の紹介であるという認識を持っていたようであり、それは彼の次の言葉から推察できる。(傍点増野、以下同)

内ヶ崎氏は「昨春二月の『新日本』に於いて僕は彼を日本の読書階級に紹介した。僕は彼の二三の詩の翻訳を発表した。しかし読書階級は静まり返って何等の反響も評論も加えなかつた、恐らくは破笛調を成さず云々」といわれているが、私はその丁度一ヶ年前の二月の『朱欒』で彼の詩を紹介している。これが恐らく第一の紹介であったのである。<sup>(19)</sup>

#### 四 一ベンガル詩人の発見

さらに、増野は大正四年(一九一五)四月号の『詩歌』において「私がタゴールの非凡の天分を初めて発見したのは多分四年前かと思いますがNation(倫敦発行)の紙上で「あらゆるもののある国」という一編であったと記憶します」と述べており、

このことから『朱欒』に掲載された一編の詩が、彼がタゴールに触れた最初の作品であったとわかる。増野が当時目にしたと思われるこの記事について私が調査したところ、ロンドン発行の週刊新聞The Nation and the Athenaeum (1907-1931)の大正元年六月一五日の記事の中に、“The Country of Found-Everything”, Translated from the Bengali of Rabindra Nath Tagoreという詩が掲載されていることが確認された。<sup>(18)</sup> 実際の記事の掲載日は増野の記憶より若干遅れるが、詩の内容から見ても恐らく増野はこの記事を読んだのではないかと推測される。

しかし、『ギタンジャリ』の英語版がインド協会から限定七五〇部で世に送られたのは記事のおよそ半年後、大正元年一月のことであり、タゴールの名声が飛躍的に高まるきっかけとなったマクミラン社版が上梓されるのはさらに遅れること大正二年三月のことであるから、増野が記事を読んだ時点で、タゴールはまだベンガルの一地方詩人にすぎなかつた。従って、イギリス経由であったとはいえ、タゴールが名声を得るよりも早い段階で増野がタゴールの価値を見出していたということは驚くべきことである。増野はインド研究を明治四二年(一九〇九)頃から初めたと語っており、従来持っていたインドに対する強い関心が、タゴールに目をつける一つの要因となつたのではないかという推測はできる。

その後、彼の元に、タゴールのノーベル賞受賞の知らせが届くと、大正三年三月号の『詩歌』において「最近かの印度詩人

ラビンドラ・ナト・タゴルのノベル賞受領の如きは物的主観に執してかの杜翁イブセン・メエテルリンク等のポリチカル芸術を以て「新時代」の旗印とする偏狭なる西方人の奇跡と云わねばならぬ」と述べ、西欧の直近の思想的傾向に皮肉を交えながらも、タゴールが西欧で評価されたことを喜んでいる。さらに、彼はタゴルの英詩集がイギリスで刊行されたという情報を得るや、早速その入手に努力したのであろう。早くもその二ヶ月後には、『早稲田文学』において、ロンドンのマクミラン社から刊行された英語版『ギタンジャリ』巻頭のイエイツの序文に深く言及し、また同社から刊行された『園丁』の中の一編を紹介しているのである。このことから見ても、彼がこの時点で既に英語版のタゴルの詩集、少なくとも『Gitanjali-Song Offerings, Macmillan (1913)』と『The Gardener, Macmillan (1913)』を手に入れたことが分かる。

## 五 詩壇の視線と評価

では、こうした増野の存在を同時代の詩壇はどのように見ていたのだろうか。薄田泣菫は増野が大阪に居た頃、梅田駅付近で彼と度々遭遇したようで、後に随筆集『艸木虫魚』の中でそ

の人物について「増野氏は生前オマア・カイヤムやタゴオルの訳者として知られていたが、そんな翻訳よりも彼自身のものを書いた方がよかりそうに思われるほど、詩人の貴稟に富んだ男だった」と評している。さらに、タゴールの翻訳については、室生犀星が『詩歌』（大四年九月）で「増野三良氏によってギタンジャリや新月が、敬虔な世にも類いない精通力学をもつて現れた。冒読されざるラビンドラナト・タアゴルは誠に増野氏に待たなければならぬことを特筆して置く」と書いており、タゴールの忠実なる紹介者として、増野に期待を寄せていたことが窺われる。また、増野がタゴールの詩を多数寄稿した『詩歌』の中心的存在であった前田夕暮は増野の没後、「氏は最もタゴールを熱狂的に讃美唱道した、氏は最も早くタゴールを我が国に紹介した人であった、其訳詩は少々硬だという評もあったが、兎に角『ギタンジャリ』『新月』『園丁』の三詩集を最も内容的に我が詩壇に移植したのは、氏の偉大なる努力といわねばならぬ」と述べている。増野は三木露風を中心に『未来』に集った象徴派詩人らと交流があったが、大正初期の詩壇に東洋的神秘主義の風を吹き込んだ稀有な存在として注目を集めていたことは想像に難くない。

一方その評価については、「日本に於けるタゴールの流行は目下のところやや輕佻の機を免れぬが、此の訳者は初めからの印度熱愛者であり、タゴールの紹介者であるという点に於いて敬意を払わねばならぬ、しかも氏は今病氣である。訳文はやや

硬いように思う<sup>(32)</sup>」「新月」『ARS』大四年八月）や、「訳文にはもう一層の流暢と明快とがあつてもよいと思うが、しかし之に対する訳者の敬虔な態度はよろこぶべきものがある」<sup>(33)</sup>「新月」『生活と芸術』大四年六月）など、タゴールの敬虔な紹介者として敬意を表しつつも、訳文については前田も触れていた通り、やや硬いという書評が多い。

## 六 増野翻訳の特色

では、こうした同時代評を踏まえた上で、増野がどのようにタゴールの英詩を翻訳したのか。その特色を増野の代表作となる『ギタンジャリ』を中心にみていきたい。

原書となる英訳詩集『ギタンジャリ』(Gitajali-Song Offerings)は大正二年(一九一三)マクミラン社から普及版が刊行。同年のノーベル文学賞受賞対象作品であり、散文詩一〇三編が収められている。このうち、ベンガル語本『ギタンジョリ』からは五三編、後の五〇編は他のベンガル語詩集から選出されており、<sup>(34)</sup>実際は英訳詩選集と呼ぶのがより適当であると思われる。なお、英訳は全てタゴール自身の手により、彼の全詩集の中でも世界的に最も広く知られた作品である。

一方、増野訳は『印度新詩集ギタンジャリ(歌の祭典)』として、大正四年三月二〇日に東雲堂書店より刊行された。巻頭にはイエイツ(William Butler Yeats)の序文も納められており、わが国としては、マクミラン社版『ギタンジャリ』の初の、完全

な全訳本と呼ぶことのできる詩集である。また、四六判、二五〇頁のこの詩集は著者装画装丁という点でも増野のこだわりが窺える一冊である。<sup>(35)</sup>タゴールの英詩に対する増野の翻訳には、いくつかの特色があるが、その中には共通して彼なりの意図が存在している。

ここでは、マクミラン社版『ギタンジャリ』第一巻の冒頭を増野の訳と比べてみよう。<sup>(36)</sup>

THOU hast made me endless, such is thy pleasure.

This frail vessel thou emptiest again and again,  
and fillest it ever with fresh life.

This little flute of a reed

thou hast carried over hills and dales,

and hast breathed through it melodies eternally new.

(原書一頁)

爾は私を無限にする、それが爾の歓楽である。

この壊易い甕を、爾は幾度も幾度も空虚にして、  
また絶えず清心な生命を一杯充して居る。

この小さな蘆の笛を、

爾は小山や谷間を超えて持つて来て、

笛を通して永遠に新しい偕調を呼吸している。

(増野訳『ギタンジャリ』三頁)

増野翻訳は詩の段落構成、基本的な句読点の位置も原文通りの形式であるものが多く、日本語の自然なニュアンスよりも原

文を忠実に日本語に起こすことを優先している。口語体の散文訳による「厳密な逐語訳」は増野翻訳の第一の特色として挙げられよう。しかし、末尾の「偕調を呼吸する」などは、極端に直訳的すぎて、日本語として不自然な印象を与えている。ここでの「breath」は「呼吸する」よりもむしろ、「吹く」「吹き込む」と訳した方がより自然であろう。このようなきこえない翻訳は『ギタンジャリ』の中に散見されるが、後に刊行した『新月』、『園丁』などではあまり見られなくなっている。増野は同時代の詩人や翻訳者達から『ギタンジャリ』初版本の翻訳に関して手厳しい指摘を受けており、再版を重ねる中で誤訳誤植の箇所などは修正が加えられている<sup>(37)</sup>。

増野翻訳の第二の特色として、増野が『ギタンジャリ』の中に何度も登場する「至高の一者＝爾」(thou)に呼応する敬語表現を訳から削ぎ落として「である調」に統一している点が挙げられる。増野より数日遅れて『ギタンジャリ』を『タゴール詩集伽陀の捧物』と題して刊行した三浦閑造はこの部分を全て文語の「給う」によって訳している。二人の訳し方の違いについて原文第一番の冒頭に対応する増野訳と三浦訳とを掲げてみよう<sup>(38)</sup>。

THOU hast made me endless, such is thy pleasure.

(原書)

爾は私を無限にする、それが爾の歓楽である。

(増野訳『ギタンジャリ』・傍線引用者、以下同)

爾は吾を無限の者とし給へり。

こは汝の喜び給うところなればなり。

(三浦訳「伽陀の捧物」一頁)

「文語調」で格調高い印象を受ける三浦翻訳に対して、「である調」の増野翻訳は簡潔でありながら力強い印象を受ける。ただし、全ての詩が「である調」の形式であるわけではなく、増野は詩の主体が女性、多くは母親である時には「ですます調」でもって翻訳を行っている。例として第六十二番の詩の冒頭を挙げよう<sup>(39)</sup>。

私がおまえに彩色した玩具を持ってきたときに、坊や、私は何故雲や水の上に色彩の遊戯があり、また何故花が様々の色に化粧されているのがよく解りました―私がおまえに彩色した玩具を与えた其の時に、坊よ、

(増野訳『ギタンジャリ』一三八頁)

増野は母から子へのやさしい呼びかけを表現する際には「ですます調」を頻繁に使用しており、この形式は『ギタンジャリ』では少ないものの、タゴールが子供に向けて書いた詩集『新月』の中では多く用いられている。この翻訳詩集では子から母への呼びかけにも「ですます調」が用いられており、親子の掛け合いをほのぼのとした温かい印象で訳している。

第三に、増野が「ルビ」を効果的に用いている点も特色として挙げられる。ルビの使用自体は明治から大正にかけて、外国語の翻訳の際に一般的に用いられて来た手法であるが、増野も

これに倣い、ルビを必要に応じて用いながら翻訳を行っている。増野は、①熟語の意味を分かりやすく説明する読み易いひらがなのルビ、②日本語では表現できないニュアンスを英語のまま表記する片仮名のルビの二種類を用いており、特に①については三冊の詩集を通して頻繁に見られる。

『ギタンジャリ』第一番の第二節にも「空虚からにして」という表現があるが、例えばこの訳に呼応する“empty”を当時の辞書で調べると「空虚ニス、空カラニナル」と記されている。ここでは増野は熟語のニュアンスが伝わりやすい「虚」という字を残しながら、「カラ」という響きの良さも残すために両者を組み合わせて用いたのである。増野訳のルビには、逐語訳の辞書的な堅い熟語の意味を和らげ、また音感を良くする意味でも工夫と苦心の跡が伺える。

増野翻訳の特色をいくつか挙げてきたが、当時は文語自由詩から口語自由詩への過渡期でもあり、翻訳の形態も未だ模索の途にあった。このため、同時代のタゴールの翻訳作品においても訳者により多種多様な形式が存在している。例えば、宗教哲学者でもあった斎木仙酔は、『タゴールの歌』（大四年六月）の中で「予は特に本書はタゴールの詩が本国にて歌謡せらるるを羨みて、彼の意を分り安く韻文にものせるなり」と述べて『ギタンジャリ』の一〇三編の詩をすべて五・七調の短歌形式に意訳している。

こうした多様な訳の中で、増野翻訳の特色に底流するものは、

原書出来る限り忠実に再現し、読者に原文の味わいを正確に伝えたいという強い意識である。増野の翻訳には、現代から見れば、やや滑稽な程に直訳的な個所も見られ、厳密には誤訳と見られる箇所も少なくない。しかし、当時まだ部分的な翻訳、意訳が一般的であった中に、原文に忠実な形式をもった全訳の詩集が未熟なりとも、短期間で三冊も世に送られたことには、歴史的な意義がある。

## 七 人間性への目覚め

大正二年（一九一三）、タゴールのノーベル文学賞受賞の知らせは、日本の知識人に激震を走らせた。それはひとえに彼がアジア人初の栄光に輝いたことによる。彼の名前は広く知られるようになり、大正四年頃にはすっかり「時の人」となっていた。この事実が、当時の日本においてタゴールの翻訳が盛んに進められる大きな要因となったことは否めない。しかし、増野はそうした社会の安直な雰囲気とは明らかに一線を画していた。彼は前述した通り、タゴールが欧米で広く知られるよりも前から、既にタゴールの価値を見出していたのであり、彼がタゴールを翻訳した要因は全く別のところにあった。

私は増野がタゴールの作品に傾倒していった要因は大きく二つあったと考える。その一つは、増野がタゴールによって、新たな思想的転換点を迎えたことである。増野は肌合わない新聞社を退社した後、大正元年から二年にかけて一年半程を神戸

郊外で放浪しながら生活していた。この頃はまだ病気を自覚する程ではなく、六甲山麓の御影村で石切りや酒搾りなどをしながらインドの幻想に耽り気儘に暮らしていたという。この時のことを、増野は後に次のように回想している。

私はあのかかるい南欧を思わせるような神戸郊外に居たころの生活とタアゴルの第一印象とを分離して考えることはできない。もう彼は四年になる。其の頃私が梨俱毘弛や外道の詩（ロカヤタのブリハチパチのもの等）に耽っているのを東京から角田浩々歌客氏が「三良子印度の毒蛇を愛する甚だ妙。しかし風俗を合せ愛せよ。Cobra-popular音相近し。『コ』の奇なるに比し『ポ』の俗なるのみ、よろしく俗を支配して後雅に望むべし。君また俗の毒を飲んでみたまへ。毒とは何、俗化すること。」と奇異を排してヒューマニストたらんことを私に提唱せられた。その後氏の所謂ワイルドの弟子がタアゴルによって更に人間性に滲徹したとも云へよう。

難解な印度のリグヴェエタや、西欧の退廃的な詩に耽り、隠遁者のように暮らしていた増野は、タゴールによって人間の生命を愛するヒューマニストとして開かれていった。これは若き増野にとって大きな思想的跳躍であったに違いない。増野は「これまで印度という言葉は西洋人ばかりでなく私達にとってもかの祭火祭酒の隠密に通じて巧みに現実を遁避し虚無を愉悦する呪文僧に奉げられた退廃的な賓辞であつたのですが、全くタア

ゴルによって何人にも読むことを許されぬ七つ封印の秘密の巻は破られて、晦渋の呪文は単純な生命の歌となつたのです。而してタアゴルは生命という大詩人の前に跪いているのです」と述べている。増野も認めた通り、タゴールは常々、「地に足をつけたヒューマニストたれ」と万人に呼び掛けていた。

この讃誦も唱歌も念珠の咒文もやめよ！

扉がみな閉つている寺院のこの寂しい幽暗い片隅で、

おまえは誰を拝んでいるのだ？おまえの眼をあけて、

おまえの神はおまえの前に居らぬのをよく見よ！

彼は百姓が堅い地盤を耕しているところ、

また道路工夫が石を砕いているところに存在するのである。

彼は彼等と、晴天の日も、大雨の日も共に居て、

彼の衣は塵埃で真白になつているのである。

おまえの神聖の長衣を脱いで塵埃だらけの大地のなかに、

彼の如くに凌辱をうけよ。

（増野訳『ギタンジャリ』二・二二頁より抜粋）

増野はタゴールのこうした魂の呼び声に答えた。増野はタゴールを「世界の心の司祭者」と呼んで憚らない。そして「あくまでリアルあくまでヒューマンに深く根ざした生命の真諦に於いて蓋しタアゴルは最も偉大であるといわねばなるまい」と述べているのである。

増野が生命を愛する真のヒューマニストとして、思想上の理想にタゴールを発見したことは彼がタゴールに魅了された第一

の要因であろう。

## 八 死の超克と内的共鳴

第二の要因としては、増野が若くして自らの死と真向かう必要に迫られたことが挙げられる。

神戸での思索に満ちた楽しい放浪の日々は、彼の病状の悪化によって中断を余儀なくされた。増野は遂に病氣療養のため、故郷島根に帰郷することとなった。元来、コスモポリタンな思想のもとで世界中の詩人の翻訳に情熱を傾けてきた増野であったが、故郷での彼の晩年は正に一日一日が迫りくる死の重圧と激しい痛苦との闘いであった。それが、どれ程壮絶なものであったかは、次の言葉から察するに余りある。

私は決して死にたくはありません。しかし死を欲求するほどさしませまっていますのです。短銃も毒薬も無用だ。私は病気を平気な顔で汽船に乗る。そして深更に海に飛び込むのだと決しました。併しラビンドラナートの智火はよく迷妄の薪を灰塵と化したのです。私は『ギタンジャリ』によって信じます。死とは忍辱に徹した生である。また嘗て喪はれた歡喜を再び宇宙の総額のうちに感触することです。私は生命とひとしく死を賛美しますがしかし『招待なくして饗宴に列ならんとするは卑劣なるが如く召さずして「死」の王国の扉を叩くは痴愚の迷誤である』と悟りました。<sup>(48)</sup>

増野は暗い病床の中で、タゴールの『ギタンジャリ』に一筋

の光を見出した。『ギタンジャリ』によって、自らの生命を全うする意味を改めて自覚したのである。実際に増野は死の直前まで翻訳の手を止めることはなかった。

増野は自らがタゴールを翻訳する真の意味について、「私は印度詩人ラビンドラナート・タアゴルの冥想を探索して死よりも強い生命をと焦燥しているのです」と述べている。増野はタゴールを「生命を拒否隠遁しない第一人者」と称しているが、タゴールは死に対してどこまでも樂觀的であり、生命の絶対の優位性を信じて疑わなかった。

この生命観をタゴールは人生の深い悲しみと共に確立した。増野に大きな影響を与えた英詩集『ギタンジャリ』の母体となったベンガル語版『ギタンジョリ』は、タゴール自身が人生の苦悩と悲しみの時期を越えて一つの境地に立った、言わば彼の精神の回復と復活を象徴する作品でもあった。

タゴールは一九〇二年から一九〇七年にかけて愛する妻と二人の子供を立て続けに病で失っている。この時期のタゴールの様子についてタゴールの生涯を研究したK・クリパラニは以下のように詳細に書いている。

一九〇七年に、彼の家庭生活の悲劇は終局に達した。末子のシヨミンドラがコレラに罹って、十三歳の若さで急死したのである。生きていれば、父のようになにかになっていたと思われる子であった。くしくもそれは、五年前にこの子の母が逝った祥月命日に当たっていた。嵐のように吹き

すさんだ五年の歳月に、タゴールはほとんど家庭生活の崩壊の苦痛を嘗めたのである。<sup>(51)</sup>

癒えない悲しみと酷い虚無感に苛まれたタゴールは、遂に所領地であるシドライホの田舎にひきこもったが、詩作は絶えず続けられた。むしろ、この深い悲哀と孤独の経験はタゴールをして永遠なる一者と向き合わせる十分な時間を与えた。まさにこの時期に創作された詩を集約したものがベンガル語版『ギタンジヨリ』であった。タゴールはその創作を通して生命に対する絶対的肯定観を確立したのである。

タゴールが辿り着いたこの生命に対する絶対的な肯定観を、増野もまた、その研究、翻訳を通して会得したいと求めていた。そして自らもタゴールのように死の恐怖を超越した強い存在でありたいと願ったのだろう。タゴールと増野の間には『ギタンジヤリ』という一つの作品を通して深い内的共鳴が見られる。

## 九 おわりに

丹羽京子氏是一九一五年代の日本におけるタゴールの紹介はイギリス経由であったと述べた上で「おおまかに言って、イギリス事情に詳しい英文学者たちがロビンドラナトの英文作品を翻訳、紹介し、後から印度哲学者などが解説を加えたのが、この当時の紹介のあらましであった。」と述べている。<sup>(52)</sup>しかし、増野のタゴール翻訳の裏に隠された真意を読みとれば、こうした概要的な通説についても詳しく検討すべき箇所が見えてくる。

確かに、増野は英文学者でもあり、イギリス事情にも詳しくあった。彼がタゴールの詩と出会うきっかけがイギリス発行の記事であったこともまた事実である。しかし晩年の増野の軸足は英文学にはなく、彼は後に「兄に熱心に私は印度行の旅費を迫っても笑った儘で返事をして呉れなかった。そして兄がお前は生命を大事に思はないかと放縦な生活を戒めたことは一度や二度やなかった」と語るほど、印度に深く傾倒しており、タゴールの翻訳は文字通り命を削りながらのものであった。彼の翻訳作品が決して表面的な紹介本ではなかったということは再度ここで強調しておきたい。

増野はタゴール来日の二ヶ月前にこの世を去ったため、二人の間に直接の交流はなかったが、日本における初期のタゴールの翻訳紹介が、「タゴールの流行」という社会的機運にとどまらず、死を目前にした一人の若い詩人の生命に対する深い思想的希求に基づく営みであったという事実は、その受容史の中に刻まれてしかるべきである。

なお、三浦関造など同時代の翻訳者たち、及び増野と関係が深かった象徴派詩人等への調査は今後の課題とする。

※書名、引用文などについては新字体に統一した。

## 注

(1) 我妻和男氏によれば、タゴールの来日は、一般に言われる三度ではなく、実際には前後五回にわたる。名声が広がるとともに、

世界各地から招待を受け、遍歴の旅に出た。欧州が戦火に苦しむさなか、一九一六年に第一回目の訪日を行う。五月末から九月初めまでの約三ヶ月である。その後アメリカに滞在し、翌年二月、帰路再び横浜訪れる。第三回目は一九二四年の中国訪問の後、六月に日本に滞在する。第四回目は、一九二九年三月であり、その後アメリカ、カナダに向かう。しかし、彼の地で採め事が起こり、すぐに引き返して日本へ五度目の来訪。五月から六月にかけて一ヵ月ほど滞在した（『タゴール―人類の知的遺産61―』、講談社、六頁、一九八一年）。

(2) 例えば、次のような先行研究が挙げられる。丹羽京子氏「タゴールと日本」『タゴール著作集』別巻〈タゴール研究〉（第三文明社、三四四―三六八頁、一九九三年）。森本達雄氏「タゴールと岡倉天心」（同書、一八六―二〇五頁）我妻和男氏「タゴールの日本への賛美と警告」（注（1）書、五一―三四頁）。

(3) タゴールは詩人であるが、その創作活動は多岐にわたり、詩集以外にも戯曲、短編、長編小説、また哲学論や教育論なども残している。本論ではそれらタゴールによって書かれた文学作品を総称して「タゴール作品」と呼ぶこととする。

(4) 丹羽氏（注（2）書、三五七―三五八頁）。

(5) 昭和期にタゴールを翻訳した山室静や高良とみ、高良留美子について先行研究が存在する。それぞれ以下に詳しい。大沼郁子氏「山室静とタゴール」「日本女子大学大学院紀要家政学研究所・人間生活学研究科」第24号（二〇一八年三月）。綾目広治氏「永瀬清子を

めぐる詩想のつながり―高良とみ・高良留美子・タゴール」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語・日本文学編』第38巻第1号（二〇一四年一月）。

(6) 増野三良の略歴については、『現代詩大辞典』（三省堂、六一―頁、二〇〇八年）、『日本現代詩辞典』（桜楓社、四四五―四四六頁、一九八六年）、佐野晴男氏「生田春月と山陰の詩壇（1）」『山口大学教養部紀要・人文科学編』第18巻（一一九―一二五頁、一九八四年一〇月）（a）、同氏「生田春月と山陰の詩壇（2）」『山口大学教養部紀要・人文科学編』第19巻（一三一―三四頁、一九八五年二月）（b）『いずれも「増野三良著作年表」を含む』。山崎克彦氏「浜田の生んだ若き英文学者歌人増野三良（翹白）」（山崎克彦、一一―二頁、一九八八年）、山崎克彦氏編『石見人物抄上巻』（島根文化研究所、一二九―一四九頁、一九五九年）を参照した。

(7) 佐野氏「増野三良著作年表」を参照（注（6）論文a、一二二―一二三頁）。明治四二年一月一日の読売新聞の日曜付録に増野翹白名義でヴェルレーヌ詩二編「街」「青いなげき」の掲載を確認。

(8) 『心の花』第13巻12号（明治四二年一二月）、14巻2号、（明治四三年二月）、同巻5号、6号、7号、8号、9号、12号、15巻2号（明治四四年二月）に増野によるヴェルレーヌの翻訳詩が掲載されている。復刻版による確認（冬至書房、一九八〇年）。

(9) 従兄弟で増野と親しかった恒藤恭は明治四三年頃を振り返って

「二人は同じ土地に住むことになった割合にはあまり度々会って話すことはなくなった。でも、会えば隔てなく話した。話は主に文学に縁のあることであつた。オスカー・ワイルドやヴェルレーヌやアーサー・シモンズやは、そのころ彼の思想を支配する詩人であつた」と述べている。恒藤恭「増野三良をおもう」山崎氏編（注（6）書、一四五頁）。

（10）杉田英明氏「大正日本の『ルバイヤート』」『東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』21巻（一頁、二〇一七年三月）。『朱槿』第2巻第11号。復刻版による確認（臨川書店、四五—四六頁、一九二二年一月）。

（11）前田夕暮は「氏には此他未だ出版されぬ訳詩集が三つもある。しかも皆いづれも訳了されている筈である。その三つとは「ルバイヤット」と「印度古代詩集」と印度女詩人サロジニ・ナイズの詩集『黄金の国』等である」と述べている。「増野三良氏を悼む」『詩歌』第6巻4号。復刻版による確認（白日社、四三頁、一九一六年四月）。

（12）佐野氏「増野三良著作年表」を参照（注（6）論文a、一二三頁）。

（13）サロジニ・ナイドゥ（Sarajini Naidu）（一八七九—一九四九）ハイデラバード出身の女流詩人。インド国民会議派においてマハトマ・ガンディーに従い、独立運動においても活躍した。

（14）『詩歌』第6巻第2号に掲載された「蛇つかひ（『黄金の国』より）」は雑誌に掲載された増野の最後の翻訳作品である（三五頁、

一九一五年二月）。

（15）増野三良「タアゴルの中心思想に就いて」『詩歌』（四九頁、一九一五年四月）。

（16）国立国会図書館サーチ及び近代文学館の図書検索をもとに作成。太田三郎氏編「日本におけるタゴール文献」（『アポロン創刊号』アポロン社、一二〇—一二三五頁、一九五八年五月）も参照した。

（17）『朱槿』第3巻第2号（四五—五二頁、一九一三年二月）。

（18）太田氏編（注（16）書、一二六頁）。

（19）増野三良「諸家のタアゴル論に就いて」『生活と芸術』（東雲堂書店、一三頁、一九一五年六月）。復刻版による確認。

（20）増野（注（15）書、同頁）。

（21）The nation and the Athenaeum, "The Country of" *Found-Everything*, "Translated from the Bengali of Rabindra Nath Tagore (Nation public company, p406, June 15th, 1912)

（22）森本達雄氏「英文詩集『ギタンジャリ』研究序章」（注（2）書、五四七頁）。

（23）増野は一九一五年に『詩歌』の中で「私が印度研究を初めてから、六年になりますが一」と述べており、この言葉から彼は一九〇九年頃から印度研究を始めたと推測される（注（15）書、同頁）。

（24）増野三良『詩歌』（四八頁、一九一四年三月）。

（25）増野三良「印度新詩人ラビンドラナート・タアゴル（Rabindranath Tagore）の使命」『早稲田文学』（東京堂書店、五五—六三頁、

一九一四年五月)。

- (26) 記事によれば、大正三年八月の時点で「タゴールの詩は漸く日本に於いても愛読せらるるに至り、過般丸善に着したる彼れの詩集及び脚本は直に売れ切れとなった程であった」とあり、増野はタゴールの詩を丸善經由で手に入れたものと推測される。「タゴールのゆうべ」『六合雑誌』第34巻第8号(東京青年会、一三〇—一三二頁)。

- (27) 増野三良『早稲田文学』(三二—三三頁、一九一四年七月)。  
(28) 薄田泣菫『艸木虫魚』(岩波書店、四二頁、一九九八年)。  
(29) 室生犀星『感想』「詩歌」(六五頁、一九一五年九月)。  
(30) 前田夕暮(注(11)書)。  
(31) 特に三木露風と親しく、増野は「その拙い訳でタゴールの非凡な詩才を早くも認めて敏感な感激の書を寄せたのは畏友三木露風氏である」と書いている(注(19)書、同頁)。没後、「詩歌」では増野の書簡が4号にわたり掲載されたが、そのほとんどが露風に宛てられている(『詩歌』(一九一六年六月・七月・八月・九月)。  
(32) 新刊紹介の書評。「新月」[ARS](阿蘭陀書房、一九一頁、一九一五年八月)。復刻版による確認。  
(33) 書評。「新月」『生活と芸術』(六九頁、一九一五年六月)。  
(34) 渡辺昭宏訳「ギタンジャリ」『タゴール詩選4』(アポロン社、二二二頁、一九六七年)。  
(35) 一九一五年一月号の『ARS』に掲載された「ギタンジャリ」の広告の中に「著者装画装丁」と記されている。

- (36) 原書は初版Rabindranath Tagore, *Gitanjali* (song offerings), Macmillan London, 1913を用い、増野訳は初版『印度新詩集 ギタンジャリ』(東雲堂書店、一九一五年)を用いた。

- (37) 増野は野口米次郎の批評に対し、「野口氏が私の第一版の誤植誤訳が随分あった『ギタンジャリ』を「原文が正當に解されうる力の有無を論ずる余裕さえ無く舊地に新しい血を云々」と随分厳重に譴責されているようですが、再版には完成したつもりです。なお第三版にも訂正をいたすつもりですから。どうぞ懇切に二三の御注意をお願いします」と返答している(注(19)書、一二頁)。  
(38) 三浦訳は三浦閑造『伽陀の捧物』(東文堂書店、一九一五年)の初版を用いた。

- (39) 増野(注(35)書、一三八頁)。  
(40) 英単語の分析には大正三年刊行の英和辞典を用いた(増田藤之助『新撰英和辞典』、丸善株式会社、三六九頁、一九一三年)。  
(41) 斎木仙酔『タゴールの歌』(岡崎書店、一頁、一九一五年)。  
(42) 増野(注(19)書、同頁)。  
(43) 明治の詩人で文芸評論家。増野は角田のこの論をいたく気に入る、増野三冊目の詩集『園丁』にこの文の内容で序文の執筆を依頼している。  
(44) 増野(注(19)書、一三一—一四頁)。  
(45) 増野(注(15)書、五二頁)。  
(46) 増野(注(35)書、二二頁)。  
(47) 増野(注(15)書、四九—五十頁)。

- (48) 増野(注(15)書。五十頁)。  
(49) 増野(注(15)書。四八頁)。  
(50) 増野(注(15)書。五十頁)。  
(51) K・クリパラーニ／森本達雄訳「タゴールの生涯(全)」(第三文明社、二〇六頁、一九八一年)。  
(52) 丹羽氏(注(2)書、三四七―三四八頁)。  
(53) 増野(注(19)書。同頁)。  
(につた・あんな／文学研究科日本文学・日本語専攻博士前期課程一年)